

Title	改竄本「繪本節用集」
Sub Title	Ehon-setsuyoushu: a composite copy of Sewa-youbunsho
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2007
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.92, (2007. 6) ,p.136(159)- 146(149)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2006年度藝文学会シンポジウム：古書-その過去・現在・未来
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00920001-0146">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00920001-0146</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2006年度藝文学会シンポジウム  
——古書——その過去・現在・未来——

改竄本「繪本節用集」

関場 武

小生が初めて古書店に行ったのは、たしか大学2年の秋頃。だから今日ご出席の佐藤道生氏らと比べると晩熟ということになる。最初に覗いたのは、家庭教師のバイトの往來の道にあった池の上の古本屋さん。次に渋谷の宮益坂を上りきったところにある中村書店。入れ込んでいた日本の児童文学関連書の蒐集のためだった。なぜ遅かったかという、別に潔癖症ではなかったが、自分が持つ本としてはウブなものでないとイヤだったからである。その頃歩いたのは、他に青山通りに2、3軒、道玄坂に1軒だけあったお店、下北沢、池の上、自由が丘くらいで、地下鉄も無く、三田からでは交通の便が悪かった神保町には未だ行っていなかった。神保町に行くようになったのは学部4年、卒業論文のテーマに御伽草子を選んでからのことだった。そして、なし崩し的に行動範囲が広がり、荻窪や神田の古書即売展に開場を待つて並び、後ろからももの凄い勢いで押され雪崩れ込むといった経験も、その頃していた。靖国通りに一時期あった北沢書店の国語国文学関係の支店の店長福原氏の大きな呼び込みの声、専修大学前の交差点の際に開店した珈琲館のストレートコーヒーとトーストの味など、古本の匂いと共にすぐに蘇ってくる懐かしい思い出である。

いわゆる和本を買った初めは学部4年の時。三田通りの清水書店で先々代のご主人から買った薄葉小本：明治5年版の「廣益正字通」。傍に斯道文庫の阿部さんか国文の檜谷さんが居られたような気がする。あるいは「国書総目録」のための慶應義塾図書館蔵書の確認作業の手伝いをしてい

たことや、斯道文庫で学生アルバイトを始めた関係もあつての幻影かもしれない。当時の文庫主事阿部隆一さんに連れられて弘文荘に行き、文庫の賛助会員の件をお願いしたそのついでに、赤色刷瘡繪本の金太郎の入札を依頼し、「いやー、こういうものはやってないもので」と反町氏が困ったような顔をしつつ引き受けて下さったのも、その頃ことである。西片町の同店、というより反町邸の応接間で古活字版や乱れ版を色々を見せて説明して下さった太田武夫氏、入手したい本のために神田の古書展での抽選に度々協力してくれた川村晃生、小野尚志、高橋信裕の3氏、何かと便宜を図って下さった清水書店の先代のご主人、本郷の木内、琳瑯閣、井上書店、神田の日本書房、金文堂、一誠堂書店、大阪の中尾松泉堂、京都の尚学堂、白州堂、それに沖森書店や藤園堂、近くは玉英堂、福地、名雲書店……、その他数え挙げて行くときりが無いくらいの多くの方々や古書店に、支払いを含めてお世話になりご迷惑をお掛けして来た。月並みな表現ながら、目を瞑ると様々な出来事が浮かんでは消え、走馬灯の如く眼前を通り過ぎて行く。如何にもがいても、二度と帰らぬ日々である。

それにしても、マスコミや業界がいろいろと仕掛けるものの、然程盛り上がりがない浅薄な古書ブーム。急激な情報・研究環境の変化、大量の蔵書構築を許さない居住環境、新刊専門書の高騰と奨学制度の低迷、研究に対する感覚の変容等々から、学生、とくに大学院生たちが本を買わなくなっている現実。従来のお店売り・目録販売は依然として健在ながら、一方でネットオークションが流行の兆しを見せつつあり、古典籍の品薄が益々目立つ、といった具合で、変わり行く街並みの姿と重ね合わせ、古書業界の行く末に不安を感じないわけではない。

その中であって、古書店街として世界に冠たる神保町の一等地で、百余年に亘って堅実な経営を積み重ねて来ておられる一誠堂書店のご当主酒井健彦氏は、慶應義塾大学文学部国文学専攻のご出身。一時期斯道文庫でも研鑽を積まれ、現在、業界の幹部としてご活躍中である。一方、雄松堂書店代表取締役の新田満夫氏とは、ご高名を承りながら、和漢書では無く洋古書ご専門ということで、これまで親しくご尊顔を拝する機会が無かった

が、シンポジウム（平成18年12月8日 於北館ホール）にご出席を賜り、酒井氏と共にその豊富なご経験と情熱の一端をお伺いすることが出来たのは幸甚であった。また、書物に明るく善本コレクターとしても有名な国文学専攻の佐藤道生氏、英米文学専攻の高宮利行氏にその蘊蓄の一部を披瀝していただき、さらに社会学専攻の藤田弘夫氏に、氏が都市社会学の見地から近年研究しておられる英国ウェールズの新古書の町ヘイ・オン・ワイについて、画像付で紹介していただいた。以上の5氏ならびにシンポジウム開催に当たりご協力いただいた方々に、深甚の謝意を捧げる次第である。興味深いテーマであったが、司会役を務めた小生の運営の拙さから、上手く盛り上がったとは言い難いものとなってしまった。すべての責任は小生にある。何卒ご寛恕の程をお願い申し上げたい。今回ご出席賜った方々の中、高宮、藤田両氏から玉稿を頂戴することができた。小生の拙稿と共にご一読頂ければ幸甚である。（注1）

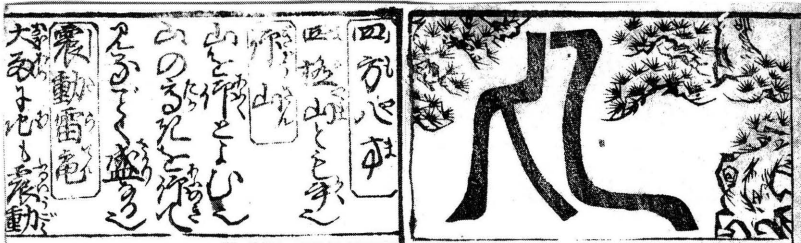
## I. 改竄本「繪本節用集」について

今から約10年前、京都・臨川書店の古書目録76号の7180番に写真付で「繪本節用集」が出品された。注記によれば「刊記なし 正徳頃 2冊 40000円」というものである。早い者勝ちという鉄則に従って、よく確かめもせず電話で注文。首尾よく入手したのが標題の書である（図①、②）。書型は、袖珍本、横本2冊。縦5.8、横9.1糎。表紙：木蘭色地紙に淡江戸茶色の草花模様。題簽：榛摺色短冊形紙、表紙中央上に寄せて貼付し「繪本節用集上（下）」と外題を墨書。内題：上巻扉オ中央、竹林の図に挟まれて「節用集（せつようしゅう）」とある。刊記・柱刻：無し。匡郭：四周単辺。丁数：（上）59〈本文59オまで〉、（下）59丁〈終丁は本文無し、匡郭のみ〉。行数：不等、最大半葉8行。字数：不等、1行5～8字。挿図：（上）59、（下）58図。各片面図。上巻の図の一部に淡い丹・黄・緑色の筆彩あり。備考：刷、保存・並み、綴糸・後補。上巻扉ウに松樹に囲まれて篆書体で「凡」の一字を出す。項目数は、（上）が123、（下）が110。

以上が本書の書誌事項であるが、落ち着いて見ると不審な点が幾つか浮



図版①



図版②

かび上がって来る。先ず扉にある「節用集（せつようしゅう）」の題名と裏にある「凡」の1字である。題名の部分は巧妙ではあるが明らかに貼り継いだである。「凡」の1字も唐突である。さらに見て行くと、上巻3ウや11オ、下巻29オと35オ、53オの下方匡郭外に髭のようなもの、上巻5オ、15オ、18オ、35オ、36オ、37オ、下巻10ウ、27ウ、28オ、30ウにも、やはり下方に黒点のようなものがある。これは何を意味するのであろうか？勿体ぶらずに結論を言えば、本書は元禄5（1692）年7月初刊本の改修再版本にあたる宝永6（1709）年版艸田子苗村丈伯編「世話用文章（せわようぶんしやう）」上・中の頭書欄のすべてと、下巻「世話字節用集（せわじせつようしゅう）」の目録頭書部分を切り取り細工を加えた改竄本なのである。（図③、④）

「世話用文章」は、その初版本の影印が「近世文学資料類従 参考文献 (152)

編9」(昭和51年11月 勉誠社)に  
 解題・索引付で記載されている。  
 補足を加えると、元禄5年7月の  
 初版：大本【Aイ】京都・佐野九  
 兵衛版、後印【Aロ】佐野彦三郎  
 版のほか、宝永6年正月版にも【B  
 イ】発行書肆名の記載のあるもの  
 と、【Bロ】無いものがある。す  
 なわち【Bイ】本は、終丁ウ刊記  
 部分に「寶永六己丑年／正月大吉  
 祥日／江戸日本橋・万屋清兵衛／  
 大坂・馬屋庄兵衛／大坂高麗橋  
 天王寺屋・大富三良助板」とあり、  
 【Bロ】本はその年記のみを残すも

のである。両者の印面に大きな差は無いが、イ本の方がやや若刷かと思わ  
 れる。【B】本は1冊本に仕立てられているものが多いが、【A】3冊本の上  
 巻1オの艸田子の序文を下巻後見返しに移動させ、同ウの番匠達が「世話」



図版③



図版④

の字を削っている図を封面に貼付し、下巻「世話字節用集」の初丁目録・凡例部分を、柱刻の「世話下」の「下」を省き巻頭に持って来ているほか、目録丁は覆刻し、若干の丁で補刻を行っている（注2）。その改刻・補刻、それに幾つかの丁に於ける匡郭の切れの状況等から、標題の「繪本節用集」は【B】の改竄・改装本であることが判明するのである。

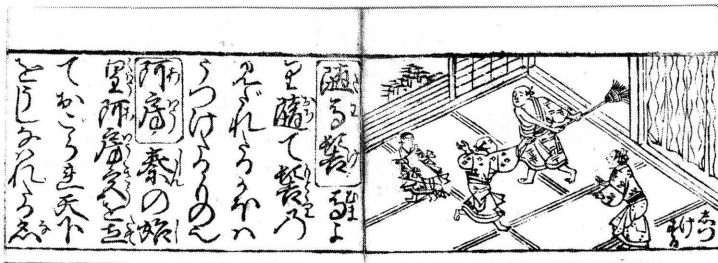
すなわち、本書は原本上・中巻の頭書欄を切り取り、各半丁分を2つ折にし袋綴横本2冊にしたもので、上册初丁扉オにある竹樹は【B】本の目録オの頭書欄にあるそれを「目録」の2字を除いて貼り合わせたもの、中央にある題名は、同ウの「凡例」第2項に

古来の節用集（せつようしう）に間（まゝ）世話字を載るといへども、一門に一字二字に過ぎず、よつて此下巻に備（つぶさ）に世話字（せわじを）のせて、諸人に便（たより）す、すてに節用集（せつようしう）に出たる字ハ省（はぶき）て不載之（ずのせこれを）

とあるものの中から下線を施した部分をちぎって貼り込んだものである。仔細に見ると原本の「目録」の「録」の字の金偏の端の一部が僅かに残存している様が窺えるのは、ご愛敬である。また、初丁ウの松樹と共にある篆書体の「凡」の1字は、同本目録ウの頭書欄にある「凡例」の「凡」と松樹を盗ったものである。そして前述した、髭のように見えるものは、原本本文の上部にあるレ点（返り点）の一部であり、黒い点のように見えるものは、同じく用文章の文字の字画の一部であることが判明する。さらに、本書の細工は念が入っていて、天地、背を含む小口すべてに灰色かかった色を付けて古色を出し、表紙・題簽、それに新しいものであるが綴じ糸までも茶色系で統一しており、表紙も元禄から明和頃の歌書等に時に見られるものを流用している。では、このような改竄本を入手してしまつて不愉快であったかと言うと、それは否である。何故ならば、まず本書は、内容の一部に差別的な語彙や絵図を含むことは甚だ遺憾であるが、可愛ゆく仕立てあげられた袖珍本であること。（図⑤、⑥）また、本書の素性を突き止めるために、色々と勉強をさせられ、それなりに愉しかったからである。そう言えば、かの臨川書店の目録には、下巻の28ウ・29オの写真が出て



図版⑤



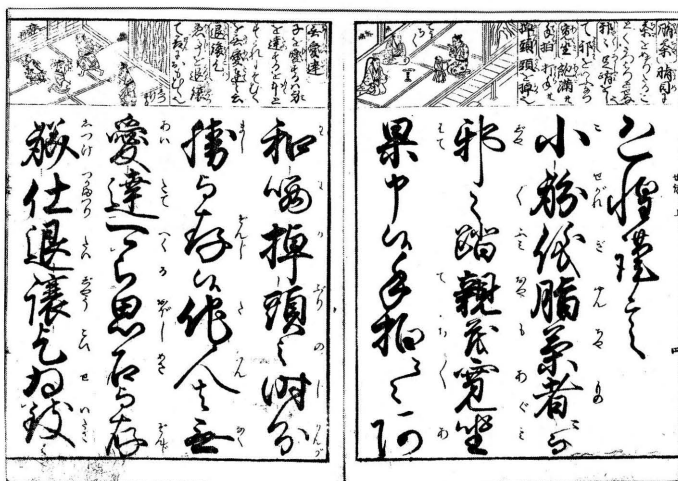
図版⑥

おり、「髭」の部分や次丁の挿絵の一部が手前の丁に回って来ている様が写っている。其の時に気が付くべきであったのかもしれないが、恨む気も悔やむ気もない。かつて「蠹海節用集」の一本と思い込んで春本「禮蘭節用集」を購入してしまったことがあったが（注3）、それと共に面目無くも楽しい思い出である。（図⑦）

ところで本書「世話用文章」には、寛延元（1748）年7月求版の改題再編本【C】「世話用文千歳袋」があり、版元の異なる2本がある。（図⑧）【Cイ】本は表紙：香色地紙、大本1冊。題簽：子持ち枠付。上方円内に「節用／字盡」と角書があり、界線を置いて下方に「世話字用文千歳袋全」と外題。封面：右方飾り枠内に「世話用文千歳袋」と大きく題名を出し、界線を置いて左に

此書に載る所の文章ハ、平生通用の文辞の中に於て、世話字・難字等を綴り容（いれ）て、其正字を知らしむ、俚言野語と雖共、本據（ほんこ）のなきものは非ず、因て和漢の群書を考索して、其出所を頭書

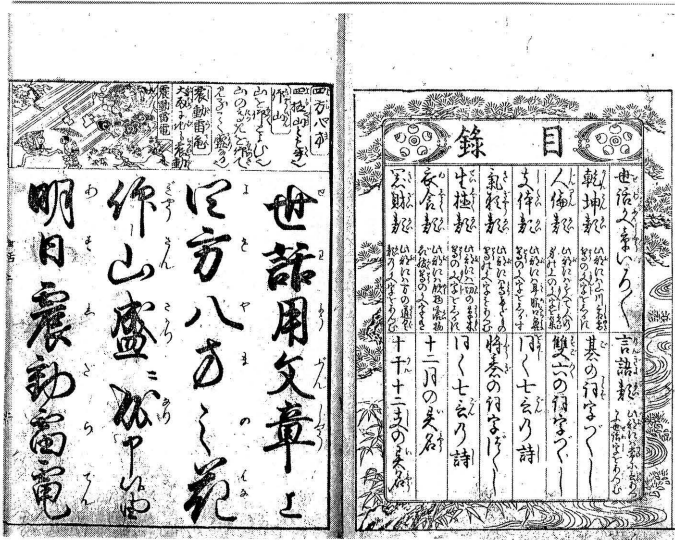




図版⑦

(かしらがき)に顕し、終に難字若干(そこばく)を挙て、各部を八門に別ち、題して世話用文千歳袋(せわようぶんせんさいぶくろ)と云

とその内容を示す。これは【A】【B】両本下巻刊記の前に在った跋文風の文章の意に通ずるものがある。続く第1丁オには能書・梁の王鋒の幼少時の事跡を絵入りで記し、ウには飾り枠内に新しく目録を立てる。艸田子の原序文は無く、以下「世話用文章 上(中)」とある用文章、下の「世話字節用集」と続く。その世話字節用の部分は、1ウに新たに出した関係上【A】【B】に在った目録・凡例が無く、表題下方に在った「下」の字も削られている。また、終丁オの尾題「世話字用文章下終」が無く、替わりに「十二月異名」と表題を立て、ウに各月4種ずつの異名を出す。後戻しは、上方に「十干異名」、下方右に「十二支の異名」を載せ、界線を置いて下方左に「寛延元戊辰七月求/大坂順慶町心齋橋筋/柏原屋與市版」と記す。また、【C口】本は、海緑色表紙。刊記の書肆が柏原屋與左衛門となっているほかはイ本と同じ。書肆名の字配りはイ本のほうが座りが良く、刷りもイ本のほうが若干良い。いずれにしても【C】は【B】の求版本で、



図版⑧

【B】を基に一部補刻を行っている。(図⑧)

## II. 繪引節用集

さて、江戸時代に数多く開版された節用集の中で「繪本節用集」を名告るものは管見には入っていないが、「繪引」ならある。従来知られているものとしては2本。1つは【D】寛政8(1796)年の初版で、文政7(1824)年版や無刊記本、明治刷のある「〈萬方多福〉繪引節用集」、もう1つは【E】〔天保頃〕刊の半紙3つ切横本の「繪引節用集」である。【D】は、巻頭程里籬畠の序「節用字集繪引源流論(せつようじしふゑびきげんりうのろん)」に、「繪引節用字集ハ。世に流布する乾坤・時候等の門類を罷(やめ)て、平生見馴たる物の體(かたち)を首(かしら)に圖して。其部類の文字を産出すなり。」云々とあり、繪入りの部門註を出して

繪引見やうの凡例ハ。右にしるす画圖(ゑづ)をもつて文字を求る時ハ。影の體(かたち)に應ずるが如く。即座に文字出る也。門類の繪ハことごとく同じきにあらず。其部下(そのぶした)の文字に随ふて。

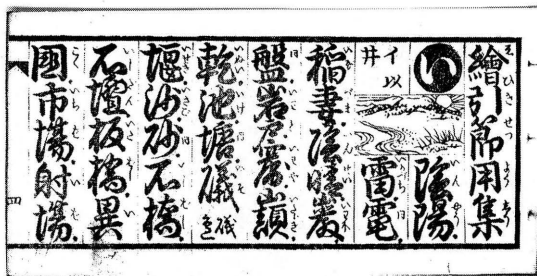
少しズ、かハリめあり。いの字の下、陰陽の文字初メにあれば。日月山川の繪あり。ちの字の下。千賀（ちか）の塩竈と首（はじめ）にあれば。海邊（かいへん）汐汲の繪あり。其餘ハこれに准じて知るべしと説明する。まさに題簽に「見出繪引節用大全（みだしゑびきせつようだいぜん）」とある通りである。繪図は門標だけでなく諸所に鏤められており、見て楽しめるものとなっている。往来物の中にも、宛先の地位の上下による書状の書き分けを、桜花や楓等を約物に使って示しているものがあるが（注4）、それらを遥かに上回る工夫である。なお、文政7年版は中本1冊、有界6行118丁。終丁ウに「皇城五緯亭合刻／江戸書林・須原屋茂兵衛、前川六左衛門、大阪書肆・鳥飼市左衛門、浅野弥兵衛、柳原喜兵衛」と出し、後見返しに「文政七甲申春改正／書肆 大阪・秋田屋太右衛門、江戸・須原屋平助、京都・小川五兵衛、同・須原屋平左衛門」と記す。（図⑨、⑩）

【E】は横本3ツ切1冊、有界9行120丁。内題：「繪引節用集（ゑびきせつようしゅう）」。封面に「繪見出早引節用集（ゑみだしはやびきせつようしゅう） 吉田屋文三郎板」と出す。

本書は「繪見出」の部分を見てもすぐ判るように、【D】本のバクリ、抄録本である。刊記は年月を示さないが、一本によれば後見返しに「京都書肆 京都・本屋新兵衛、東都書肆 江戸・吉田屋文三郎」とあり、版式・装丁等を勘案すると天保末年頃の刊行かと思われる。なお、繪引きを謳うものとしては、他に、外題に「字盡節用繪鈔」とある「〈文章〉字盡節用解」（天保12年初刊、嘉永2年補刻版アリ）や、明治のものであるが「西洋画引節用集」初編、2編（明



図版⑨



図版⑩

治5年、6年刊（注5）や明治9年の「〈布告必用〉漢語繪字引」等があり、往来物に「商賣往来繪字引」「道具字引図解」などがあるが、紙幅の都合上その紹介はまたの機会に譲ることとする。

注

- 1 原本引用に際しては、角書をくゝで括って示したほか、多くある振り仮名は適宜取捨選択をし、採用した場合には（ ）に入れて記した。また、書肆の住所については、都市名だけをあげ詳細は省略に従った場合がある。
- 2 宝永6年有刊所・分冊本は元禄版と同じで、下巻目録の柱刻は「世話下」とあり。
- 3 この顛末および同類の節用集に関する報告に関しては、「わたしの独り言：中途半端」（「三田文学」83巻77号 平成16年5月）を参照されたい。
- 4 例えば享保13（1728）年刊林蘭女艸藁・西川祐信画「女萬葉稽古さうし」や改題本寛保2（1742）年刊「女教文章鑑（ぢよけうぶんしやうかゞみ）」など。
- 5 本書については拙稿「通俗和英節用集—明治期英和・和英節用集の世界（その2）—」（慶應義塾大学日吉紀要・英語英米文学50号 平成19年3月）の中でやや詳しく紹介を行ったが、その際、「鶴見大学紀要」35～44号 国語・国文学（平成10年3月～同19年3月）に、新山茂樹氏による影印・収録語彙索引を含む詳細な論考があることにまったく気が付かなかった。先行文献の検索を怠ったことを反省するとともに、それでも書誌・解題の面では拙稿の存在価値も無しとはしないことが判り、安堵している次第である。